

ラキアはノヴァの紫髪を優しく撫でながら、片方の手で自分のデカチンを握り、ノヴァの唇にぴたりと押し当てた。熱く脈打つ亀頭が、ノヴァの柔らかい唇を割り、ぬるりと口内に沈み込む。

「んむっ💖！お、お姉さんの・・・太い💖」

ノヴァの瞳が一瞬驚きに揺れるが、ラキアは容赦なく腰を押し進めた。

「じゅぽっ💖じゅぷう💖じゅぽじゅぽっ💖」

湿った音が溪谷に響く。ラキアのデカチンがノヴァの喉奥でゴリゴリと抉る。ノヴァの細い喉が膨らみ、涙目になりながらも、インキュバス特有の長い舌を絡めて必死に奉仕し始める。

「んぐっ💖ブチュレロレロ💖んむう💖」

ラキアはノヴァの頭を両手で固定し、ゆっくりと腰を前後に振り始めた。デカチンが喉を犯すたび、ノヴァの頬が凹み、涎が糸を引いて顎から滴る。ラキアの爆乳が揺れ、乳首が硬く尖っていく。

「どうだ？ アタシのデカチンフェラチオ！お前の可

愛い口マンコにぴったりじゃねえか。インキュバスなのに、こんなに簡単に喉奥まで飲み込んじゃつて。アタシの勝ちだなあ」ラキアは嘲るように笑いながら、腰の動きを加速させる。デカチンを喉奥に押し込んだまま、ぐりぐりと腰を回す。その動きに合わせてノヴァの瞳がトロロンと蕩けていく。

「ふう〜。アタシも堪らなくなってきたなあ♥」
興奮と快感でさらに膨張したデカチンをラキアはノヴァの口から引き抜いた。

「ぶはあ♥」

「まだまだイカせてやるよ。お前の可愛い顔に、アタシの精液、たっぷりぶっかけてやる！」

ラキアは高速で自慢のデカチンをシコった。

「シコシコシコシコシコ！」

「どぴゅっ★！びゆるるるっ★！どぴゅ★どぴゅ★びゆるっ★びゆるっ★！！」熱く濃いシールド精液が、ノヴァの顔面に勢いよく叩きつけられる。

「あわわ♥あ！熱〜い！熱〜い！ドツピユドピユ

出てるぅ💖顔が・・・はじけるぅぅ💖」

ノヴァの大絶叫が響く。

「ふう★きんもちいい〜★」

ラキアは満足げにデカチンを震わせた。

ノヴァはアへ顔のまま舌を伸ばし、ちゅぱちゅぱとデカチンから滴る精液を舐め取った。

「ふふ！よしよし、いい子だ！でも、まだ終わんねえよ！」ラキアはノヴァを押し倒し、今度は自分の上になった。そしてノヴァの勃起チンポを自分のアナルで啜え込んだ。

「おらおら！お前みたいなザコシヨタちゃんは、アタシの尻穴で十分だな！こいつでイッちまいな！」アナル特有の熱くぬるぬるした内部が、ノヴァの先端を優しく迎え入れる。

「待っ💖・・・お姉さん、まだ💖！」

「ずぶうううっ★！ぬぷう★！！」一気に根元まで啜え込まれるイケメンチンポ。

「わひい💖なか！ヌツルヌルぅ〜💖」

ノヴァの全身が硬直し、ビクビクと震える。

ラキアは容赦なく腰を振り始めた。

「パンッパンッパンッ！！」尻を打ち付けるたび、爆乳がブルンブルンと激しく揺れる。あまりの快感にノヴァは白目を剥いて舌を出してしまう。ノヴァのデカチンはラキアのケツマンコにきゅうきゅうと締め上げられ、先端からガマン汁をピュルピュルと飛び散らせた。

「くおお★チンポ！気持ちいいぜ★でも、お前はもつと気持ちいいよなあ★くうう★」

「んあっ♡、あっ♡、あっ♡、だめっ♡お姉さんのケツマンコ！気持ち良すぎて！イク！イクイク！イククううう♡」全体重をかけた騎乗位ピストンに耐えられるはずもなく、ノヴァは20ピストンであっさりと爆発した。

「ぶぶりゅ♡ぶつりゅ♡ぶつぴゅ♡ぶぴゅ♡どっぴゅ♡どっぴゅ♡どっぴ♡どっぴ♡どっぴ♡どっぴ♡どっぴゅ♡」

「おお！ケツの中に・・・な、中出しかよお★この程度のピストンで暴発するなんて、インキュバスも大したことねーなあ！」

ラキアは余裕とばかりにピースサインをきめ、ゆっくりとアナルからイケメンチンポを引き抜いた。



ノヴァのイケメンチンポはイッたばかりだというのに、ビクビクと起立していた。

「はあはあはあはあ💖」

ノヴァは肩で息をしながら、アへ顔をさらしている。よほど気持ち良かったのだろう。

「お姉さん・・・♡お願いいい♡まだオチンポの疼きが止まらないのぉ♡お姉さんのお口で気持ち良くしてえ♡」



ノヴァはそう言って精液の滴る勃起チンポを突き出した。

（うお！くっそエロお★）